

鴨東の古代

——古墳～奈良時代の遺跡調査成果からみた集団動態——

伊藤淳史

1 はじめに

平安京遷都以前の古代における山背盆地北部について、考古学的な検討は、古墳などが良好に遺存する嵯峨野や乙訓地域など、おもに桂川流域を中心とする西部域や、多数の窯跡が知られる北辺の岩倉地区など、資料状況に恵まれた空間で進捗してきたといえる。そこで本稿では、それら諸地域に対しいささか研究手薄な感のある盆地東部の東山山麓一帯において、古墳～奈良時代に関連する考古学的情報の集積をはかりつつ、集団の動態や地域像の復元を試み、今後の広域研究への貢献を目指すこととした。

順序としては、まず、広い範囲を密に調査している京都大学吉田キャンパス構内の調査成果を精査し、古墳～奈良時代遺跡のひろがりについて確認することからはじめる。この際にあわせて、当該時期のまとまった遺構・遺物の出土がありながら未報告となっている吉田南構内A O22区の調査について、詳しく呈示する。その後にそれ以外の地区、キャンパスの北側では北白川～高野にかけての比叡山麓地区、南側では平安時代の六勝寺・白河街区の下層にあたる岡崎地区、祇園・八坂から烏戸野にかけての東山地区、の順で検討を加える。最終的には、これら各地区の状況を総覧して、地域全体における遺跡の消長を見直し、集団の動態を読み取ることにしたい。

なお、今回検討対象とするのは、上述したように盆地東北部でも鴨川以東の一帯であり、これ以後一般に用いられているように「鴨東（おうとう）」と呼称することにする。ただし、厳密な定義は無い地域名であるので、本稿では、鴨川から東山の山麓までの空間で、北は比叡山の麓まで、南は現在の九条通付近（平安京の南京極）あたりまでの範囲を指すものとしている（図59参照）。この範囲は、律令制下の山背国における愛宕郡の鴨川以東にほぼ対応する。愛宕郡内で活動していた古代氏族についての情報は、文字史料からも得られており、関連する重要な研究がいくつか知られている。本稿では、それら文献史学の成果について深く立ち入った検証はおこない得ないけれども、最終的には、考古資料から得られた集団の動態がいかなる意味をもつものか、相互の成果を照合しながら考察を加えておきたい。

2 京都大学吉田キャンパスにおける調査成果

比叡山西南麓の扇状地縁辺に位置する吉田キャンパスは、南は聖護院から北は北白川にかけての1600mあまりに及ぶ距離があり、古代の遺構面標高もおおよそ49m～66mと17mの高低差がある。地形環境の特徴は2つに大別される。北～東半の北部・本部・吉田南構内では、弥生前期末の大規模土石流に由来する白川系の黄色砂層が基本地形を形成し、その上面に弥生中期以降の遺構や包含層が堆積している。一方南～西半の医学部・病院構内では、黄色砂層がみられず、高野川系の河床礫に由来する砂礫層上に平安期以降の遺構や堆積が形成されることを基本としている。これは、西側を流れる鴨川の浸食が平安期までは及んでいたことを示しており、この一帯での奈良時代以前の遺跡は、後世の浸食で流出してしまっている可能性も考慮しておく必要がある。

本節では、以上の土地条件の特質をふまえて、構内における古墳～奈良時代関連の調査成果をみていくが、まず吉田南構内A O22区（220地点）の未報告の成果について詳しく紹介し、そのうえで吉田キャンパス全域の状況を検討する、という順で進めたい。なお、

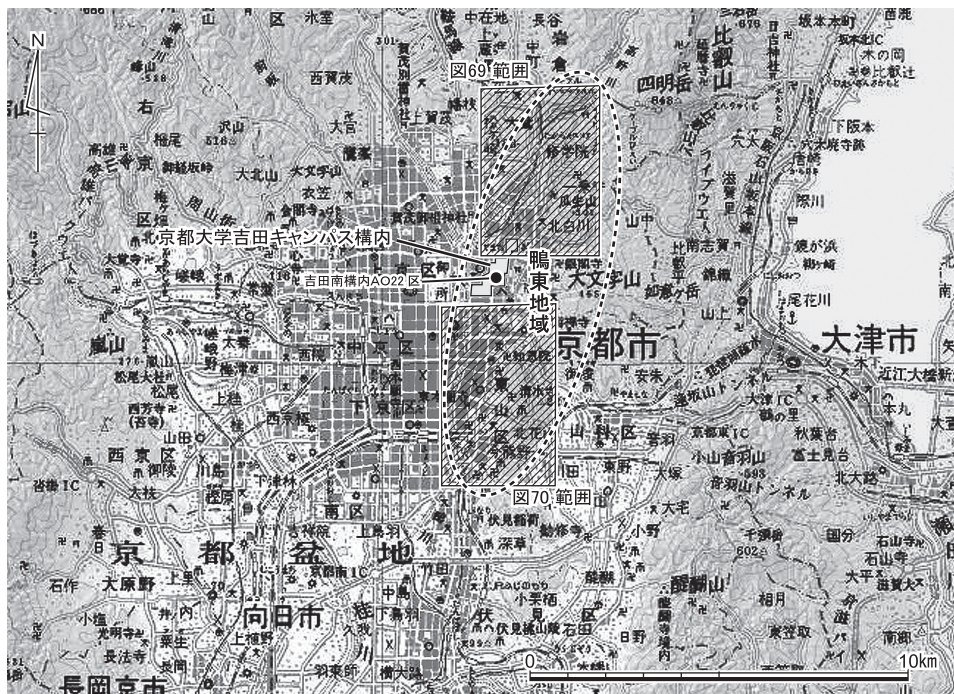


図59 本稿の対象地域 縮尺1/20万

京都大学吉田キャンパスにおける調査成果

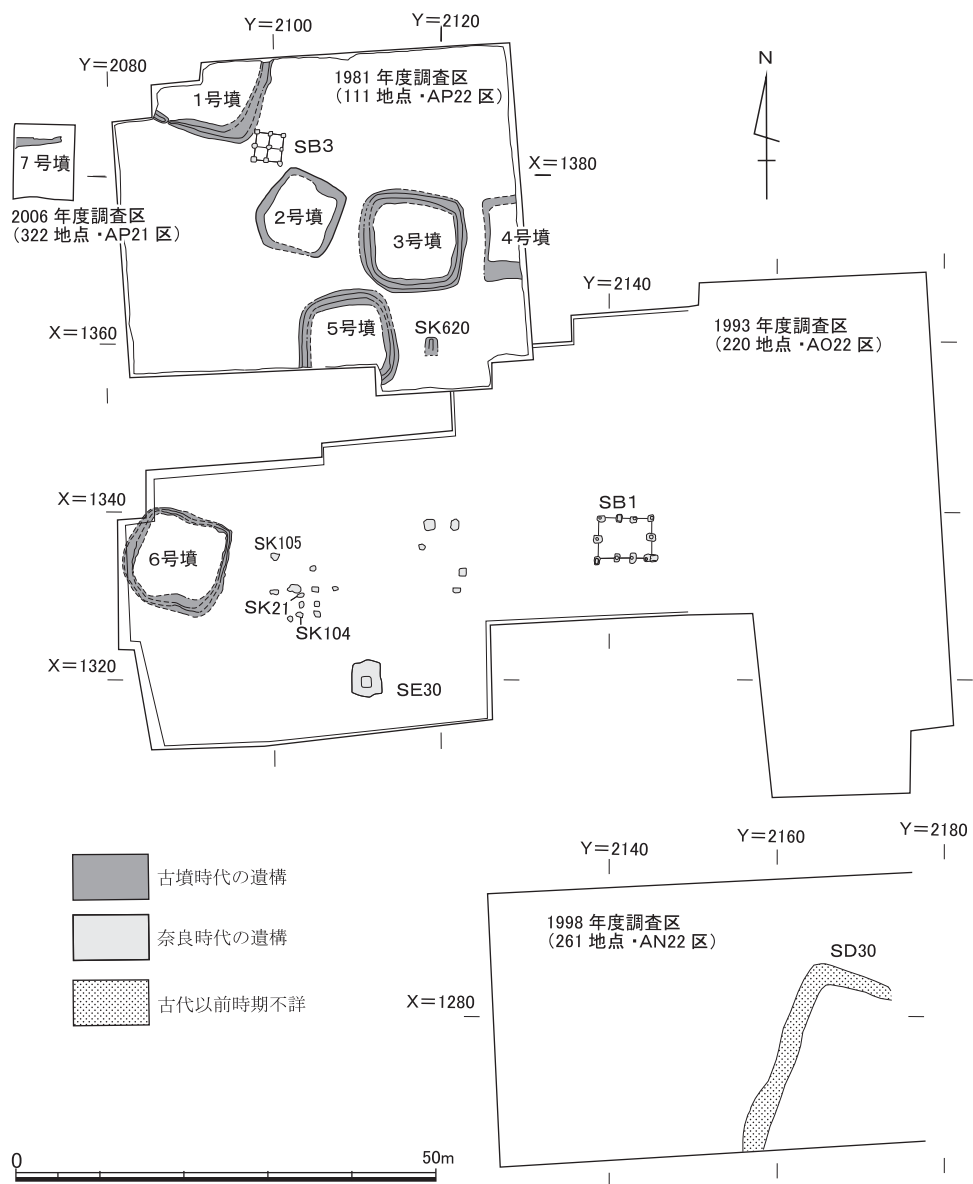


図60 A O22区とその周辺の古墳～奈良時代遺構 縮尺1/900

以下本稿で用いる古墳時代の須恵器編年については陶邑編年〔田辺1981〕、飛鳥時代以降奈良時代については奈良国立文化財研究所の飛鳥編年〔奈良国立文化財研究所1978〕および平城宮編年〔奈良国立文化財研究所1976〕を採用し、各型式の暦年代観については菱田哲郎による整理〔菱田2007 pp.19-36〕におおむね依拠している。

(1) 吉田南構内A O 22区 (220地点) の調査成果

調査区の位置については(図59・図版1)を、また、調査全体の概略については〔伊藤1999〕を参照されたい⁽¹⁾。ここでは古墳～奈良時代に関連する遺構配置を、隣接調査区とあわせて示した(図60)。以下、遺構－遺物の順に詳しく述べる。

古墳時代の遺構 (図61, 図版12-2) 調査区西北部の黄色砂上面において、方墳を1基検出した。北側に隣接するA P 22区 (111地点) でも5基の方墳と1基の土壙墓が検出されており〔五十川・飛野1984〕、これら是一群を成すものと考えて「吉田二本松古墳群」と呼称するとともに、今回の方墳を6号墳とした。後世の破壊と削平をかなり被っており、均質な黒色土を埋土とする周溝が途切れ途切れに残存しているに過ぎないが、周溝の心の間で東西約11m、南北約10mを測る。唯一確認できる隅部の北東コーナーは、直角に近く屈曲している。また、東周溝でみると真北から約10度あまり東に振る方位を示す。主体部や墳丘盛土の痕跡は全く確認できなかった。

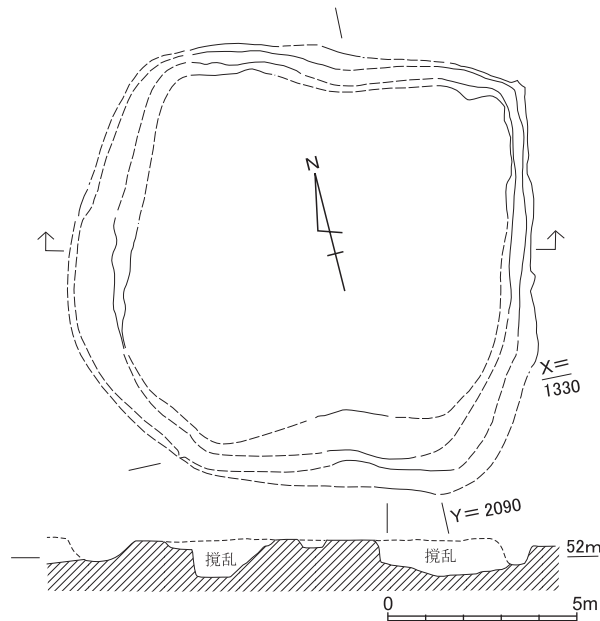


図61 吉田二本松6号墳 縮尺1/200

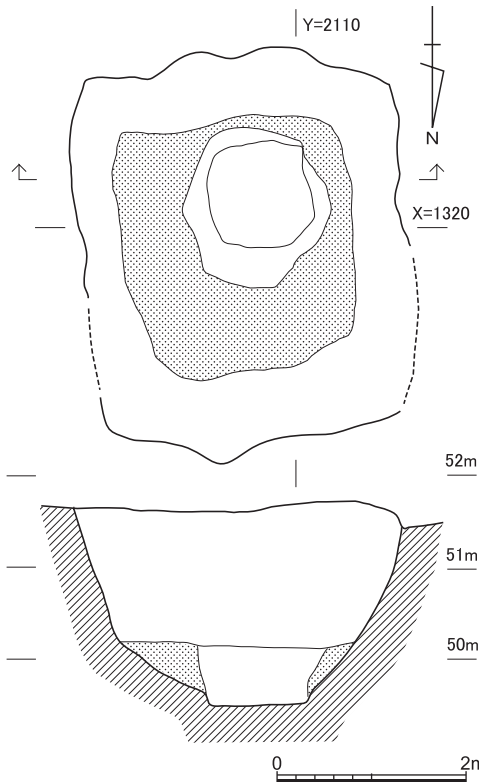


図62 井戸 S E 30 縮尺1/80

遺物は、この6号墳周溝内や、これを破壊している古代・中世の遺構埋土から、供献されたとみられるTK23～47型式の須恵器が出土している。ほか、40mほど離れた調査区中央付近からも須恵器や家型埴輪の破片が出土している。ただし埴輪は、南側のAN22区(261地点)から多数出土している破片と同一個体と想定されており、5世紀前半代に比定される型式の特徴をもつものであった。

奈良時代の遺構(図62・63, 図版12-3～5) この時代の遺物包含層は黒褐色土で、調査区の西半で堆積が確認される。遺構も西半一帯を中心に確認され、多くは黄色砂の上面でその黒褐色土を埋土としている。井戸1基、掘立柱建物1棟、1辺1m程度の方形土坑群などがある。

井戸 S E 30 (図62) は、東西が約3m、南北約4mをはかる隅丸方形で検出された。検出面から1.5m下部の中央部には不整形な輪郭が確認され、そこから0.5mほどで底面となる。有機質の遺存は認められなかったが、本来は1辺が1m程度の方形木枠が据えられていたものと推定でき、裏込には礫を多く含んだ黄褐色土が充填されていた。この裏込土や木枠内の埋土から遺物が若干出土している。底面は平坦で水溜のような特別な施設はみられない。

建物 S B 1 (図63) は、調査区中央付近の微高地上にある南北2間東西4間の掘立柱建物。柱穴の掘形は0.8～1.0m程度の隅丸方形で、うち8つに径0.3～0.4m程度の柱あたりを確認した。柱間は1.9m～2.2mとばらつきがある。南北の並びがやや乱れているが、東西方向はほぼ真東西に方位をとる。埋土からはごく少量の遺物が出土した。

方形土坑群は、調査区西半でまとまって検出されている、一辺1m程度の隅丸方形や不整形な浅い掘り込みである。黒褐色土を埋土としていることから、ほぼすべて奈良時代に属するものと判断しているが、遺物の出土する遺構は限られており、土坑SK21から土師

器類, S K104・105からは少量の製塩土器が出土しているにとどまる。これらの土坑群は, 分布にまとまりがあるものの, 並びに規則性が乏しく, 柱あたりが見つかるものもないので, 建物の柱穴と認めるには至らなかった。ただし, 廃棄土坑とみるには遺物の出土が少なく, また後世の破壊も著しい地区なので, 掘立柱建物として並ぶはずの柱穴が消失してしまっている可能性もある。

古墳時代の遺物 (図64, 図版13) 1～5・8・10・15は6号墳周溝埋土内からの出土, 7・9・11・13・14・18・19・21はこれに近接した後世の遺構や包含層中からの出土。このころ6・12・16・17・20の須恵器と, 家形埴輪片22・23・25は, 調査区中央を南北にはしる12世紀代の溝S D 6とその周辺からの出土である。家形埴輪については, 前述したように南側のAN22区(261地点)で多数の破片が出土しており, その報告に際して紹介済みのもの〔千葉・阪口2005 図84-a～d〕を再掲した。

須恵器についてみると, 蓋については, 口径がおおむね12cm台前半, 天井部に丁寧な回

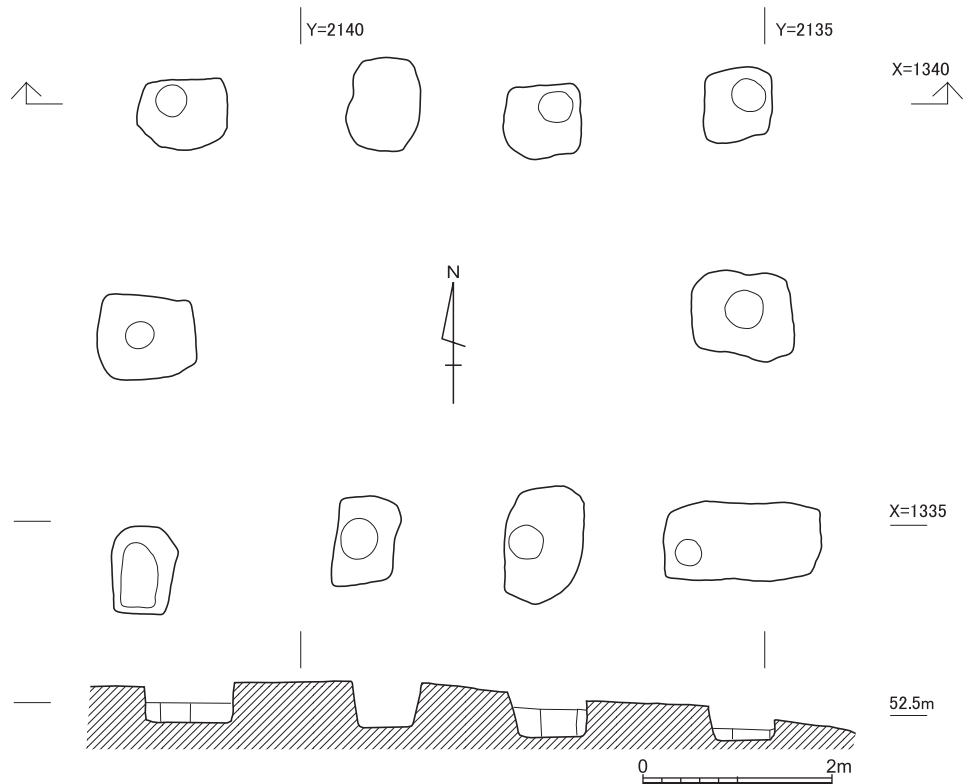


図63 建物S B 1 縮尺1/80

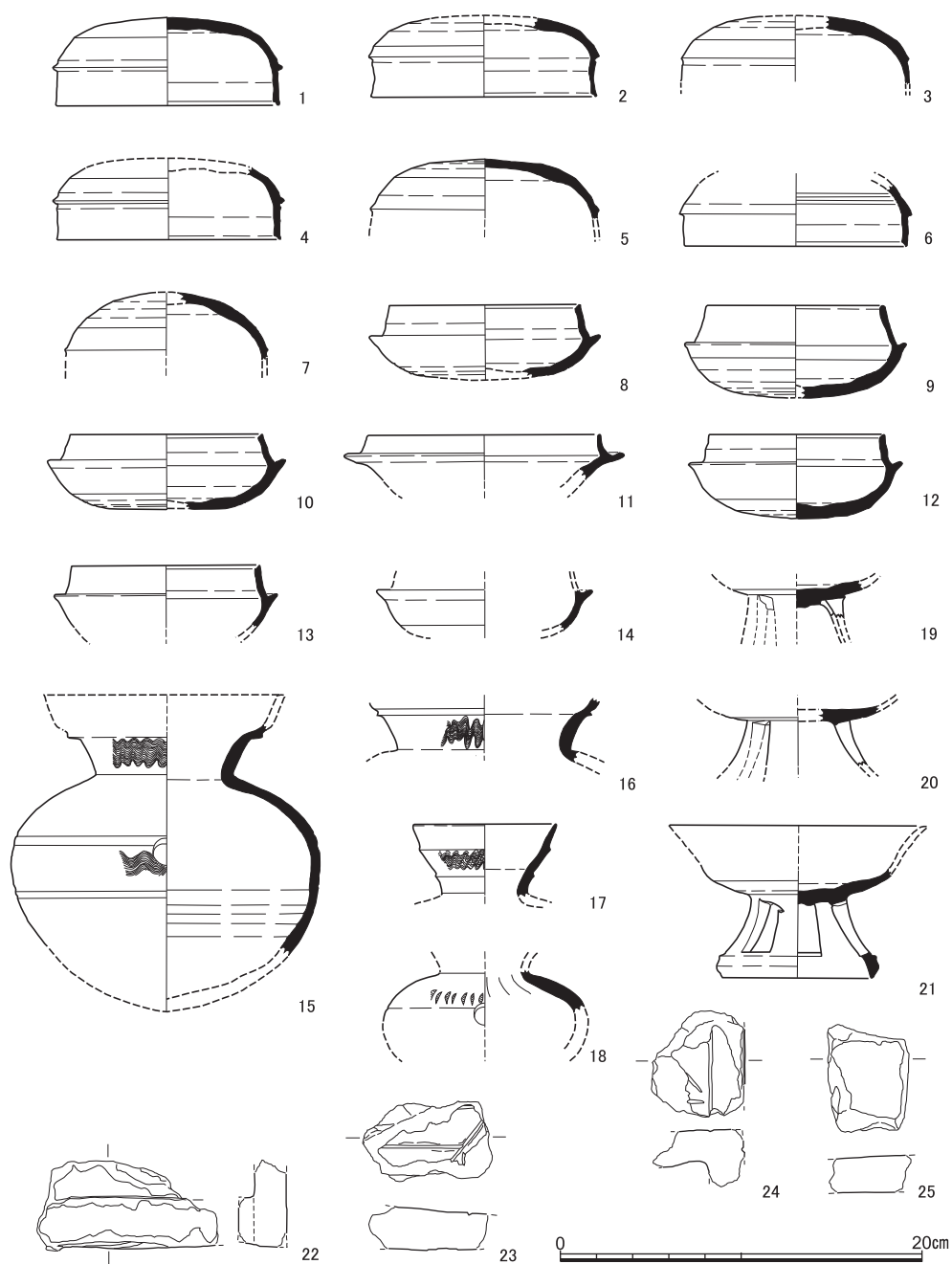


図64 A O22区出土古墳時代須恵器・埴輪（1～4・8・10：6号墳北周溝，5：同西周溝，15：同東周溝出土。ほかは古代以降の遺構・包含層からの混入出土）

転篋削りを施し、口縁部との境は突出した鋭い稜を成している。杯についても、11を除いて丁寧な作りで、やや内傾する高いちあがりをもち、口径は10cm前後をはかる。これらは、北側のA P 22区で出土している供献須恵器類と特徴を全く同じくし、おおむね陶邑編年でのT K 23～47型式に比定できるもので、5世紀後半に位置づけられる。一方で家形埴輪片22～25については、その特徴から、南側のA N 22区で多数出土したものと同一個体となる可能性が高く、5世紀前半のうちでも中葉に近い時期とする評価が下されている〔千葉・阪口2005 p.128〕。須恵器と埴輪で年代にずれがある点については、あらためて触れることにしたい。

奈良時代の遺物（図65・66、図版4） 上記した遺構の埋土以外に、包含層である黒褐色土や、後世の遺構や包含層からも比較的多く出土している⁽²⁾。土師器では、内面に一段の放射状の暗文をもつ杯30のほかには甕32や鍋38・39がある。須恵器では杯Bと、それとセットを成す蓋がもっとも目立つ。製塩土器44・61～66はいずれも破片で全形をうかがいがたいが、内傾・内彎気味の口縁形態をもつものが主体で、62・63の内面には布目圧痕が認められる。なお、特筆される遺物には54の墨書土師器がある。内面に放射状の暗文がみられる杯Aで、底部外面に「麻呂」と認められる。全体の四分の一程度が残存しており、平安時代の井戸S E 29の上層から出土した。これらの資料は、土師器杯の器形や暗文のありようから、おおむね平城宮Ⅲ期、8世紀中葉ごろに比定できるであろう。

遺跡のひろがり 以上に述べてきたA O 22区の周辺では、互いに接するように北側のA P 22区（111地点）や、南側のA N 22区（261地点）などがひろく調査されており、古墳～奈良時代の遺構や遺物が出土していることはすでに触れてきた。これら隣接諸地点の成果も参照しながら、遺跡のひろがりについて確認と検討をしておく（図60）。

古墳時代については、吉田二本松古墳群とした5世紀後半の方形墳墓群の展開があり、A P 22区で1～5号墳と土壙墓、A O 22区の6号墳のほかに、狭い範囲の調査であるが西方のA P 21区（322地点）で東西方向の溝内から同時期の完形の須恵器杯蓋が並んでみつかり、7号墳の周溝と判断された〔伊藤2009〕。一方、南側のA N 22区では明確にこの段階の遺構や遺物が認められない状況を考慮すると、古墳群は南にはひろがらず、それより北側一帯に展開しているものと考えるのが自然である。

ただし、問題となるのは、家形埴輪片はむしろ南側のA N 22区で量的にまとまって出土していることと、同地点では無遺物ながら直角に曲がってはしる溝（S D 30）が検出されていることである。この溝については、10度ほど東に振れる方位をとっており、同様な軸

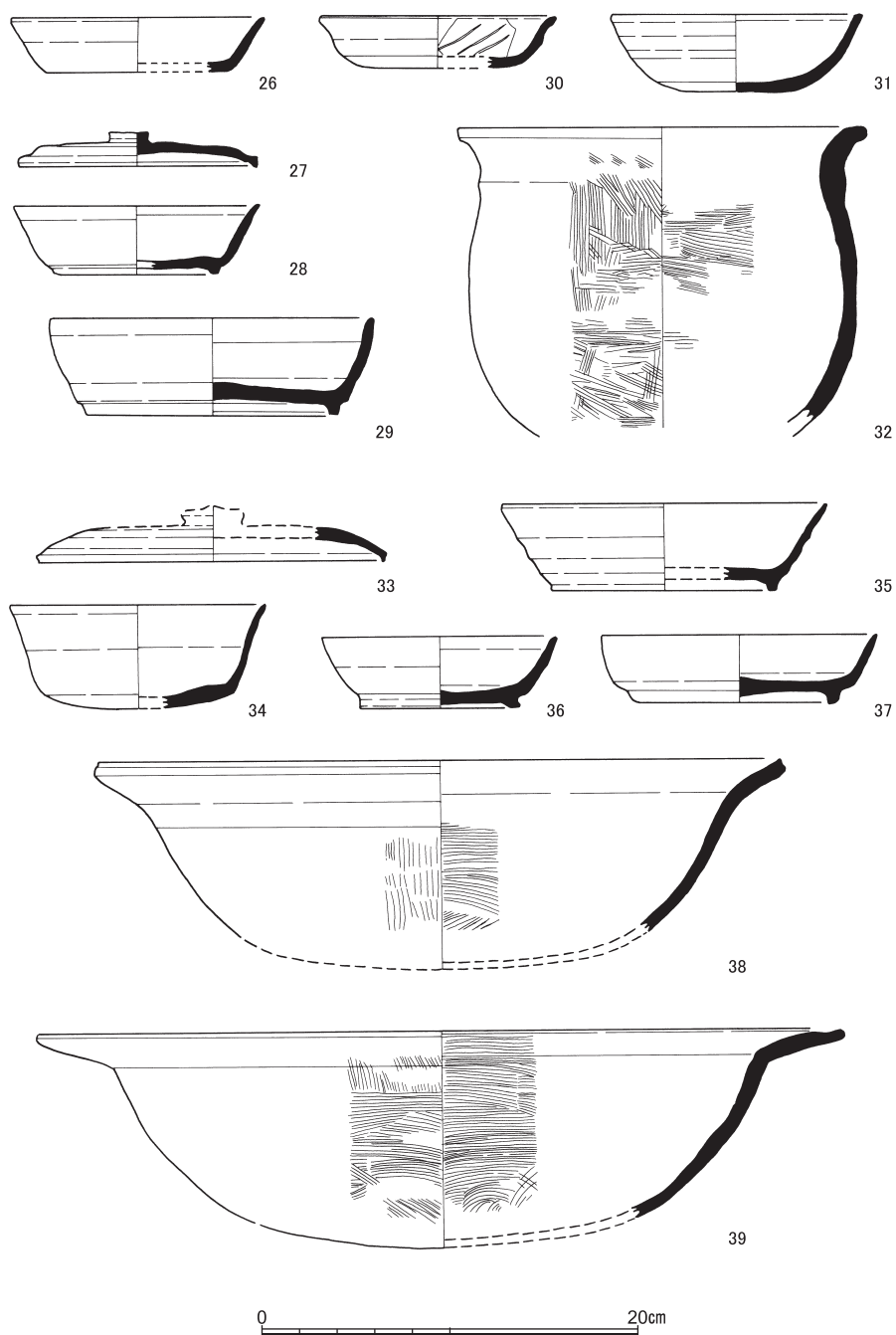


図65 S E 30出土遺物（26～29須恵器，30～32土師器），黒褐色土出土遺物（33～37須恵器，38・39土師器）

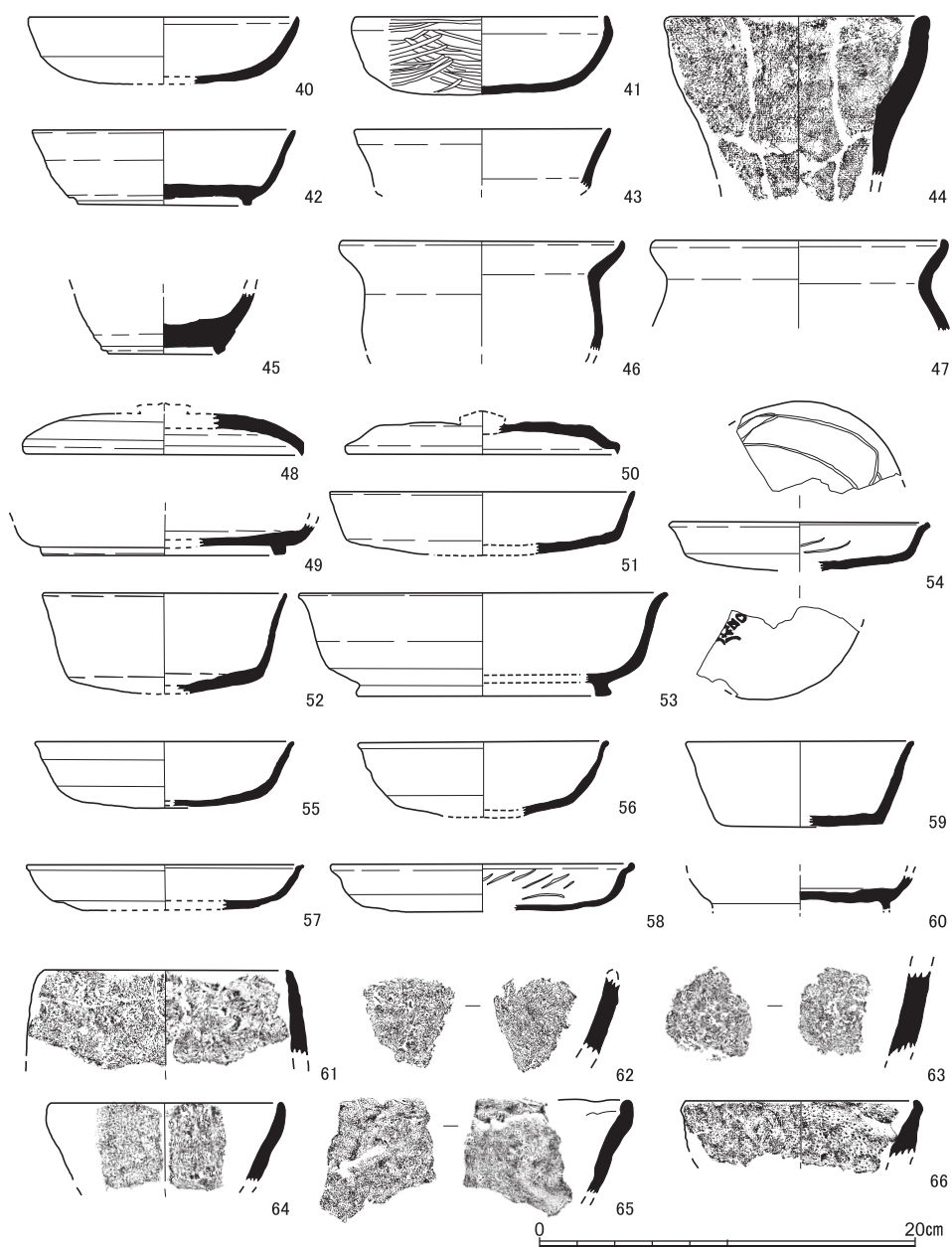


図66 S K 21出土遺物 (40・41・46・47土師皿, 44製塩土器, 42・43・45須恵器), S K 104出土遺物 (65・66製塩土器), S K 105出土遺物 (61～64製塩土器), S B 1 出土遺物 (48・49須恵器), 平安時代以降の遺構および包含層からの出土遺物 (54～58土師器, 50～53・59・60須恵器)

線の振れをもつ1・2・6号墳との関連が注意される。また、時期的に先行する5世紀前半と評価される家形埴輪の存在を重視するならば、比較的大型の盟主的な墳墓が南方にまず築かれ、その後に北側一帯に小墳墓が展開する、という流れも想定可能であろう。ただし、軸線の振れで2つにグルーピングできる1・2・6号墳と3～5・7号墳の出土須恵器群に、対応する明確な時期差を指摘することは難しいので⁽³⁾、方墳の示す軸の傾きが有意なものであったとするには決め手を欠いている。そして、家形埴輪片についても調査区内全体に散在する出土状況であり、積極的に溝と関連づけられる位置にはない。よって現状では、5世紀後半の方形墳のひろがりにはA O22区から北側を中心に、東西方向に連なって展開している、という以上の評価は難しいと言える。先行する盟主墳が存在して南方にも墓域が広がる可能性については、今後の検証課題となろう。なお、これらの段階の集落域に関しては、現状では全く手がかりを得ていない。

その後の展開では、おもに飛鳥時代にかかわる6～7世紀代についてはほとんど資料が欠落しており、問題となるのは奈良時代からとなる。

奈良時代についてみると、A P21区で2間×2間の掘立柱建物が見つかっており、A O22区においても、西半のみで井戸、建物、土坑が見つかったことから、現状では南北方向に帯状に施設が散在する村落かとみられる様相を呈している。A N22区では遺構・遺物とも確認されていないので、少なくとも南東方向へのひろがりはなかった、とみてよからう。A N22区の西方が未調査であることから、A O22区から南西方向への遺跡の広がりについては、まだ可能性が残っているということになる。

以上は、A O22区周辺のみに限った状況であるが、これを広域における動向に位置づけた場合どのように評価できるであろうか。次に、京都大学吉田キャンパス構内全体での調査成果を見ていくことにする。

(2) 吉田キャンパス全域における調査成果

古墳～奈良時代に関連する何らかの成果が報告されている構内遺跡の調査すべてについて抽出した(表2)。地点番号や地区・調査区名は京都大学文化財総合研究センターが採用しているものを援用した。そしてそれぞれの地点の各時期毎の成果について、情報の信頼度として、

A：確実な遺構と遺物の確認 (●)

B：遺構は未確認だが確実な包含層と遺物の確認 (○)

C：遺物が出土しているのみ (△)

の3つのランクに分けて示した。

結果をまず総覧しておくとして、A・Bランクの成果は、ほとんどが吉田南構内以北および以東になっている。医学部構内がすべてCランクである点は、先述の地形環境を反映しているものと理解できる。ただし、より南方の病院構内では、奈良時代以前の遺構や包含層が確認されている地点がわずかにある。この一帯においては、高野川系流路が西方に後退して土地条件の安定が確保され、後世の浸食も免れ得た場所が存在したのであろう。ちなみに、平安期の護岸が39地点で確認されている。

それでは、おおむね暦年代で3・4世紀代を庄内・布留式並行期、5世紀～6世紀後葉ごろまでを古墳時代中・後期、6世紀末～7世紀代を古墳時代終末・飛鳥白鳳期、8世紀代を奈良時代、として、時期ごとの変化をみていこう（図67）。

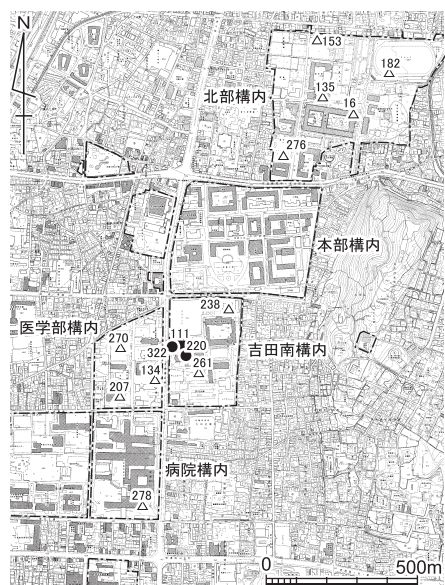
古墳時代の遺跡 現状で確実に古墳時代後期までの遺構として確認できるのは、さきに資料を紹介した吉田南構内の111・220地点（A O 22・A P 22区）一帯にひろがる吉田二本松古墳群（5世紀後半）に限られている（図67-2）。それに先行する段階、すなわち弥生終末期～古墳前期に相当する3・4世紀代の庄内・布留式並行期についてみると（図67-1）、遺物の散発的な出土が北部構内や医学部構内などにみられるものの、いずれも北～東方からの流れ堆積に由来する資料と考えられる。ただしそのなかで、北部構内153地点（B J 31区）の流路S R 2からは3～7世紀代各時期の資料が出土していることから、とくに古墳時代の前期についても、東方の北白川地域に遺跡が存在した可能性を示唆する情報として注意しておきたい。

古墳時代終末・飛鳥白鳳期の遺跡 この段階の遺構の確認地点は北へ移り、本部構内一帯が中心となる（図67-3）。それらは、完形の須恵器の出土する土坑や溝（230地点・271地点・277地点）、甕棺状の土師器甕の単独出土（168地点・214地点）など、いままでのところ墓かと思われる遺構に限られている。そして、218地点や277地点では、出土遺物が無いため時期比定の根拠を欠くものの、直径が10～20m程度になろうかという円形の周溝状遺構が確認されており、古墳時代終末期の円墳が存在していた可能性が高いものと考えられる。なお、北部構内についても、明確な遺構は見つかっていないものの、遺物や包含層の状況からみて遺跡のひろがりが見えてくる。後述するように、北白川から一乗寺にかけての比叡山西南麓の一帯には、古墳時代後期から終末期にかけての古墳が群在していたとみられるので、本部構内から北部構内にかけての墳墓は、それらのひろがりが見えてくるものと理解できるだろう。

京都大学吉田キャンパスにおける調査成果



1. 庄内・布留式並行期 (3・4世紀代)



2. 古墳時代中・後期 (5世紀～6世紀後葉)



3. 古墳時代終末・飛鳥白鳳期 (6世紀末～7世紀末)



4. 奈良時代 (8世紀代)

〔凡例〕●＝Aランク地点（確実な遺構にともなう出土遺物が確認される），○＝Bランク地点（遺構は未確認だが、遺物包含層が確認でき、遺存良好な遺物が出土する），△＝Cランク地点（遺物が出土しているのみ）
数字は調査地点番号（表2参照）

図67 京都大学吉田キャンパス構内の古墳～奈良時代関連調査地点 縮尺1/25000

奈良時代の遺跡 さきに報告した吉田南構内の220地点から北側の一帯、本部構内の南縁までにかけての範囲と、北部構内の東南部一帯で、遺構や遺物が頻繁に確認されている（図67-4）。それらの中間にあたる本部構内中央～北部構内南辺にかけての一帯では、この段階の資料が非常に希薄であることから、現状では南と北それぞれ別個の遺跡のひろがりとしてみておきたい。南の遺跡については、75地点から220地点にかけての北東-南西方向に400mあまりの範囲に掘立柱建物、堅穴住居、井戸、溝、土坑などの各種遺構が散漫に分布している（図68）。出土土器は甕や鍋、製塩土器などが目立って組成し、日常生活を営んだ空間であったことが色濃くうかがわれる。75地点の堅穴建物2棟については、奈良時代までこの種の住居が残存したことを知りうる貴重な事例となっている。ただしこれらは、カマドをもたず、一辺3m前後四方と非常に小型であった。75地点付近が推定集落域の北縁となることを考慮すると、集落内成員の日常の住居というよりも、見張り小屋などの特殊な機能も想定できよう。その場合、集落内部の建物は掘立柱建物を基本とする構成であったと考えることになるが、288地点と111・220地点それぞれで2×3間および2×2間総柱の建物が比較的近接して見つかっており、集落内の構造を考えるうえで興味深い。なお、これらの建物の軸線は揃っておらず、計画的な配置と言い難い状況であることから、集落が公的な施設であった可能性は低いものといえよう。

北部構内の東南部、9地点や12地点においても、溝状遺構が確認され、完形に近い土師器甕や和同開珎の出土をみるなどしており、この一帯に確実に遺跡のひろがりが見られる。これより西側の調査地点については遺構の確認例が無いことから、遺跡は東方へと展開している可能性が高いと思われる。構内の東側、北白川小倉町・別当町一帯に展開している集落の西端が及んでいるとも考えられよう。この点は次節以降であらためて触れることにする。

3 その他の地区における調査成果

本節では、構内以外における考古学的な情報を、構内での成果との関連性も考慮しながら集成・検討を加える（図69・70、表2）。なお本文・表・図中の番号は『京都市遺跡地図台帳』第8版（京都市文化市民局2007年3月刊行）における遺跡番号を採用している。

（1）比叡山麓地区（図69）

高野・修学院・一乗寺 2件のみしか情報が無いけれども、いずれもきわめて重要な意味を持つ成果である。

その他の地区における調査成果

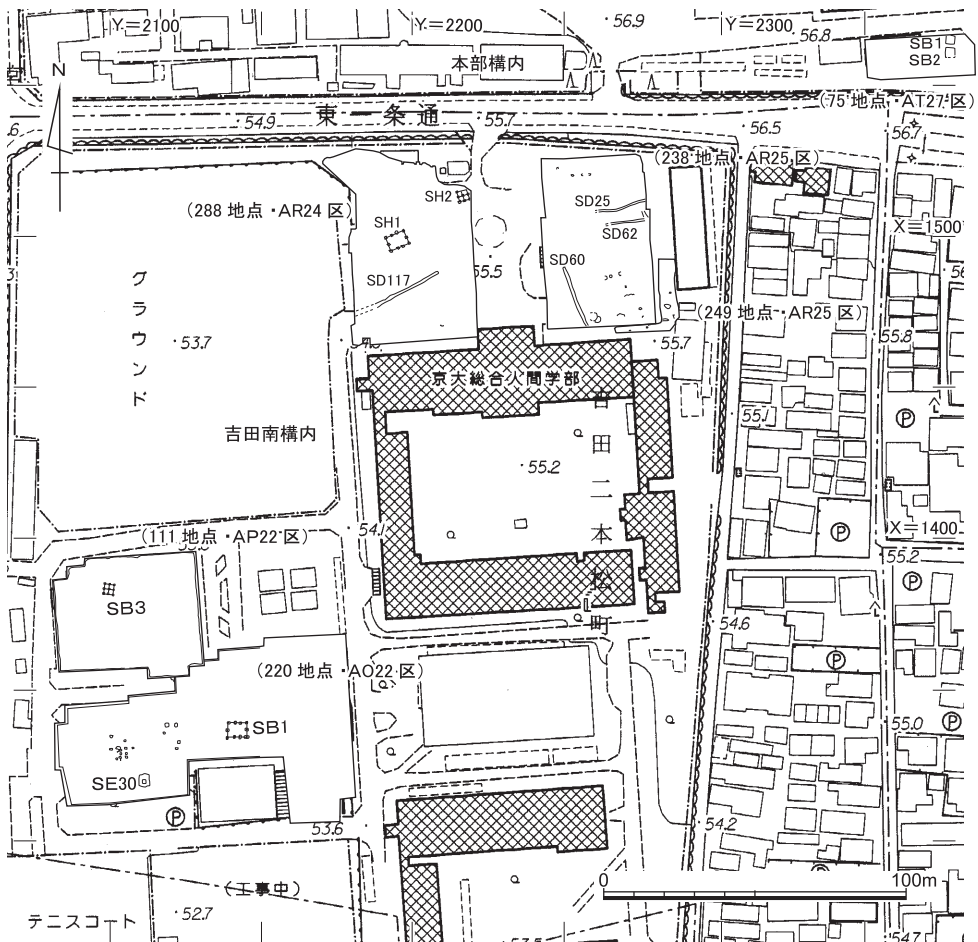


図68 吉田南構内～本部構内南辺検出の奈良時代遺構 縮尺1/2500

小野毛人古墓（C322）は、鴨東地域の北縁、京都盆地を南西に望む山麓斜面に位置している。1613年に石槨墓と金銅製墓誌が発見された後、明治期の墓誌盗難事件などを契機に整備され、遺物は京都国立博物館に収められた。経緯や整備時の古墓の知見は梅原末治の報告に詳しい〔梅原1918〕。小野毛人は、遣隋使として著名な小野妹子の子であり、おもに7世紀後半代に活動したとみられている。有力豪族の古墓として貴重な事例であるとともに、古代豪族の小野氏が、近江の湖西地方とともに、比叡山を超えた西側のこの地一帯を領有したことを示す重要な遺跡である。

向畑古墳（398）は、縄文時代遺跡として知られる一乗寺向畑町遺跡における1986年の

発掘調査に際し、偶然見つかった円墳である〔平尾1987〕。横穴式石室の痕跡である石敷と径20m程度に復元できる円形の周溝があり、6世紀末～7世紀初頭に比定される須恵器が出土している。この種の古墳は群を構成するのが通例であることから、この地域にも群集墳が存在していたことを示唆する重要な発見である。

北白川 北白川廃寺(397)や瓦窯(396)、その南方に同時期の集落遺跡として小倉町別当町遺跡(400-2)が知られている。

創建が7世紀後半にさかのぼる北白川廃寺については、東方基壇と塔基壇の2つが確認されており、寺院として考古学・文献史学双方からの研究蓄積があるものの⁽⁴⁾、廃寺の下層や周辺に確認される遺跡との関係については、深く検討されたことはなく、少し整理しておく必要がある。近年までの一帯における調査位置と内容が簡略にまとめられているので〔丸川2007 表3・図13〕、調査番号はこれを援用しながら述べる(図69)。

北白川廃寺の推定寺域内で集落関連遺構が報告されているのは、調査1・2・3・9である。調査3や9では基壇の版築層や整地土層が断ち割り調査され、明らかに寺院に先行する段階の溝や掘立柱建物の存在が確認された。うち掘立柱建物は、廃寺関連遺構と軸線を異にして西へ振る方位をとっている。同様な方位の振れを示す遺構は、調査1で南北溝、調査2でも掘立柱建物が見つかり、切り合い関係から寺院造営直前段階の遺構とみられている。

一方、南方の小倉町別当町遺跡の範囲内では、調査16～18において、堅穴建物が計19棟と掘立柱建物5棟などが報告されている。うち調査18では無文銀銭・瓦塔・唐三彩も出土している。〔長戸2007〕によると、堅穴建物の時期幅は6世紀中葉～8世紀前半で、主軸では最低2群に分けられ、7世紀中葉に第1群から第2群へと移行するものとされる。掘立柱建物の方位についてはいずれも西に振れており、調査18ではそれが堅穴住居の下層で検出されている。出土遺物は飛鳥時代後期(7世紀後半)が圧倒的に多いとして、その段階が集落の盛期と評価されている。

以上より、北白川廃寺に先行する建物の遺構としては掘立柱建物があり、軸線の方位を西へ振る特徴をもつことははっきりしていよう。しかし、堅穴建物の明確な確認例は小倉町別当町遺跡の範囲内にとどまっており、寺域の下層まで分布していたかどうかは定かでない⁽⁵⁾。寺域の南限付近にあたる調査13・14などでは、集落に関係する遺構は確認されおらず、またこの地を南北方向に長く縦断した立会調査の所見では、寺域内の北半と南半の間には谷地形が存在して堆積状況が大きく異なり、小倉町別当町遺跡は寺域内には及ば

ない範囲で想定されている〔竜子・尾藤1996〕。よって、小倉町別当町遺跡の集落は、寺院南方の空間に立地してその創建期段階に隆盛していたことは確実だが、寺院に先行して存在した掘立柱建物主体の集落がそれと一体のものとなせるかどうかについては、未解決ということになる。

なお、上記以外の遺跡としては、現在は全く地上に姿をとどめていないが、池田町古墳群（398）や追分町古墳群（408）といった終末期の古墳が遺跡地図に登録されている。これらの実態は全くわからないけれども、北白川には戦前～戦中期に掘り出された横穴式石室についても記録があり〔京都市北白川小学校編1959 pp.51-53〕、前述した一乗寺向畑町古墳に類するような古墳が群在していたのであろう⁽⁶⁾。また古墳以外にも、甕棺墓の発見も報告されている（表2・図69の調査B）〔家崎・加納1984 図版48〕。京都大学本部構内においても、終末期円墳の周溝とおぼしき遺構や単独の甕棺遺構が複数見つかったことを前節で紹介した。これらは、位置からみて、上述した北白川一帯の墳墓群の末端が及んでいるものと評価できよう。山麓の小倉町別当町集落から東方に張り出す尾根状の微高地は、平安期以降に京都盆地から近江への路面（白川道）が築かれていくが、飛鳥～奈良時代においてもここに集落と墳墓などが点在していることは⁽⁷⁾、この段階から北～東国へのルートのなものが存在していた可能性を示唆しよう。

（2）岡崎地区

弥生・古墳時代の岡崎遺跡として吉田山の南麓一帯の広い範囲が設定されている。上層が院政期の六勝寺・白河街区として面的に認識されていることもあり、数多くの発掘調査が実施されて現在に至っている。1992年までの調査履歴は〔上村1993 図1・表1〕に集成されており、ここでの調査次数表記はそれに従う。それらのうち、古墳～奈良時代関連の情報を抽出し、その後に実施・報告されている目立った成果の得られた調査についてはA～Fの記号を付して追加し、表2に概要を、図70に位置を示した。

地形の傾斜が緩いこの地区では、先史時代以来平安後期の整地に至るまで存続したと想定される、湿地や流路状遺構が随所で見つかった（3・33・45・49・50・54・58・62次およびA地点東半・C地点南半など）。うちA地点や3・33・54次地点で弥生後期～古墳前期（庄内・布留式並行期）の土器や木製品がまとまって出土しており、この時期の集落がこれらの地点の至近に展開していたことがわかる。そして、この時期前後の遺構として、A地点東半の湿地で堰や木材集石、その東側のF地点で土坑、C地点で弥生後期の竪穴建物1棟、B地点で弥生後期～古墳前期の方形周溝墓が10基確認されているほか、D地

鴨東の古代

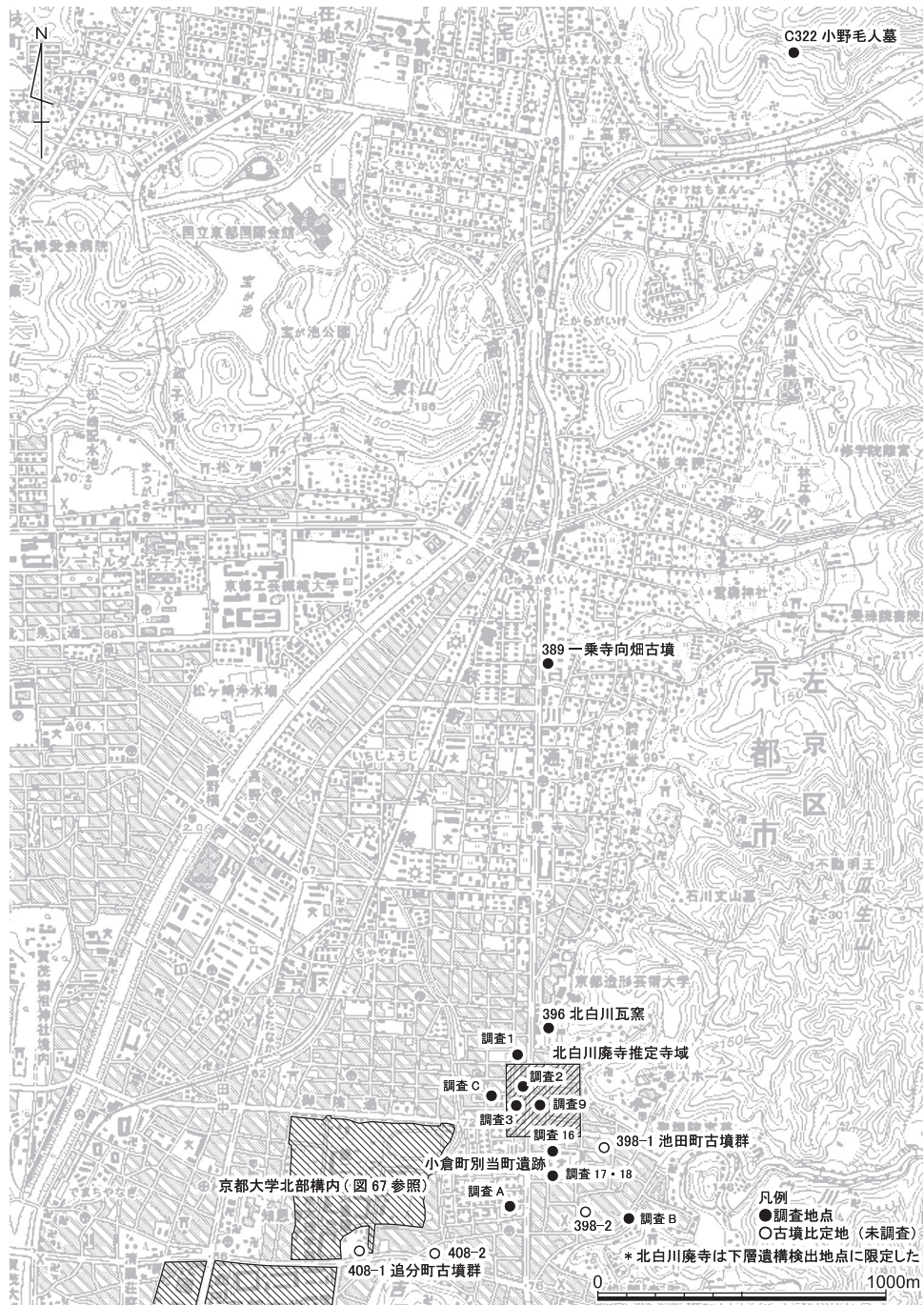


図69 古墳～奈良時代関連遺跡と調査地点（その1：北白川～高野地区、縮尺1/25000）

その他の地区における調査成果



図70 古墳～奈良時代関連遺跡と調査地点（その2：岡崎～東山地区、縮尺1/25000）

点でも庄内式期の方形周溝墓かとみられる溝が報告されている。他方、遺跡東北方の諸地点では遺物の採集にとどまり、遺構や包含層は確認されていない。よって、古墳前期段階の岡崎遺跡は遺跡指定範囲の中央～西半域を中心とし、A地点など湿地帯周辺に居住域、その西方に墓域が展開していたと想定される。

以上の各地点は、古墳時代中期にはいったん途絶するようで、再び資料が出土するのは5世紀後半の須恵器TK208型式以降となる。古墳時代後期の集落関連遺構として、B地点で竪穴建物2棟、C地点で竪穴建物5棟と掘立柱建物1棟ほかピット群、38次地点で掘立柱建物1棟が報告されている。また、45次地点では流路内から完形に近い須恵器杯・蓋などが出土し、近辺での遺構存在が想定されている。この地点が当該期の資料出土の西限となっている。墳墓の遺構としては、A地点において、径約20mおよび12～13mをはかる円形の周溝埋土から陶器TK10型式の須恵器が出土し、6世紀前葉ころの円墳2基が存在していたとわかる。なおこの古墳は、1955年の改葬時まで宮内庁の陵墓（後高倉太上天皇）比定地で「鶴塚」と呼ばれていた塚に相当する。院政期まで墳丘が残存していたことが史料から確認されるとともに、同種の塚が北方の平安神宮内にも存在し（西天王塚）、古墳の残骸の可能性が指摘されている〔丸川1996〕。このほか、遺跡北東辺のE地点で墓壙とみられる土坑や周溝の可能性が高い円形の溝が確認され、古墳後期の土器類や滑石製紡錘車が出土している。こうした成果から、古墳後期段階の集落域については、中央の湿地帯を挟む両側、西側のB－C地点にかけてと、東側の38次地点一帯の2単位が存在したと考えられる。そして、それぞれに対応する墓域としてA地点やE地点があり、集落域の北側に円墳や土壙墓を設けていたと復元される。

なお、その後の7世紀代以降の資料は稀少となり、奈良時代については遺構・遺物ともにまったく報告されていない。

(3) 東山地区

古墳と寺院の確認のみで、明確に把握されている集落遺跡は無く、遺物出土から存在を推測するにとどまる。

寺院にはともに奈良朝以前の創建と伝わる法観寺（532）と珍皇寺（535）がある。法観寺については、出土瓦や塔心礎の特徴などより天武朝期の創建が説かれるなどしてきたが〔田中1938〕、2009年に塔周辺で実施された発掘調査により最古級の埴伝の出土があり⁽⁸⁾、白鳳寺院であることが確実に裏付けられた。しかし、寺域や関連する集落遺跡の存在については一切不明である。珍皇寺については、1992年に現珍皇寺北門から約50m北側の地点

における立会調査で(図70-a)〔尾藤ほか1993〕、白鳳期以前とみるべき桶巻造り格子目叩きの平瓦などがまとまって出土し、関連性が注意されている以外に、考古学的な情報は無い。

古墳については、東山の山頂から山麓にかけて多数が確認されるが、本格的な発掘調査を経たものはほとんど無く、時期比定などに不確定要素が多い。將軍塚古墳群(527)は、華頂山(215m)の山頂に位置する3基(『京都市遺跡地図【第8版】』による1～3号墳)と、周辺斜面部に小規模な墳丘が群集していることが把握されている。明治41年に2号墳かとみられる竪穴式石室、昭和14年に1号墳かとみられる箱式石棺がそれぞれ調査されているが、いずれも墳形など古墳としての情報の多くは失われていた〔岩井1908a・b, 村山1940〕。古墳前半期段階の首長墓として位置づける見方が主流ではあるが〔丸川2000〕、出土遺物や主体部に関する情報に不詳な部分が多く、後期の群集墳に含める見解もある〔宇野2009〕。八坂方墳(529)は、高台寺境内にある一辺20m強の方墳であり、二段築成や円筒埴輪の存在が知られており〔宇佐・河合1951〕、中期段階の首長墳と評価されている。これらから南へ2km程度離れて、鳥戸野古墳群(557)、本多山古墳群(558)、本多山古墳群泉山支群(559)など、後期～終末期の群集墳と目される小規模な円墳がまとまって存在しているほか、塚本古墳(550)や総山古墳(555)のように孤立して存在するものもある。鳥戸野古墳群については、古墳時代の須恵器が採集されてきており〔井上1979, 佐藤1981〕、近年の測量調査の結果では15基の円墳で構成されることが報告されている〔陵墓調査室2003〕。内部主体が確認されたものは無いが、横穴式石室である可能性は指摘されている。こうしたなかで、本多山古墳群泉山支群の3基については、工事立会中斜面に横穴式石室が露出して緊急に調査され、6世紀末～7世紀初頭ごろの須恵器や金環などが出土した〔北田1985〕。また、これに至近の泉涌寺境内においても、土塀改修にともなう立会調査で、横穴式石室壁石が破壊されて土塀基礎に転用されている状況が確認され、同様な時期の須恵器類がややまとまって出土している(図70-f地点)〔土生田1981〕。発掘による情報が乏しい中で、この地域に分布する群集墳の内部主体の状況が把握された稀少な事例であり、他の多くの古墳主体部の様相を類推させよう。

集落については、上記の南北2群の古墳に対応するように山麓に展開していたと思われるが、情報は乏しい。平安時代以降の法住寺殿の下層にあたる京都国立博物館構内の調査(図70-b地点)で少量の遺物が採集されているが、弥生末～古墳前期の土器が目立っている〔網ほか2009 図版25〕。またその西隣接地の調査では(同c地点)、「古墳時代の土坑」

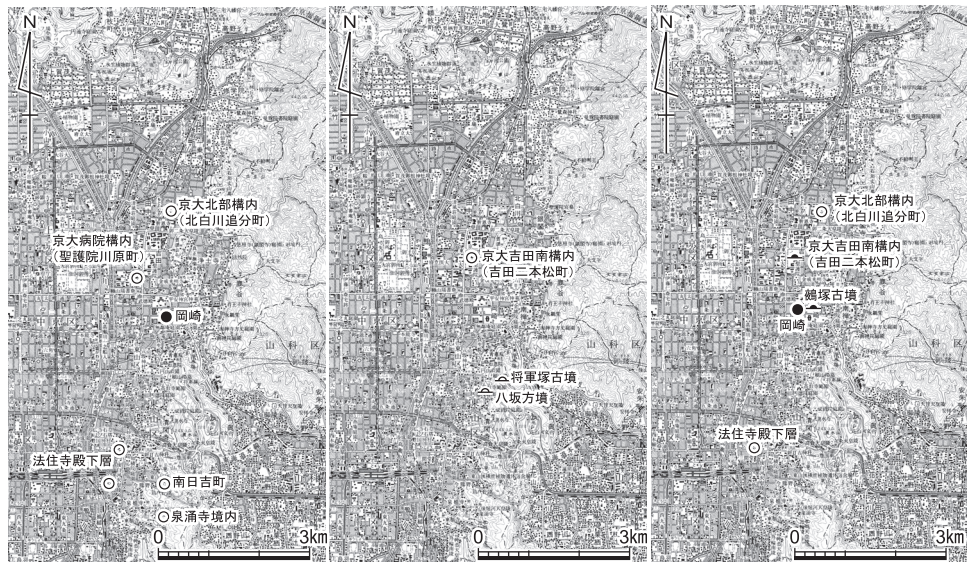
が報告されているものの、時期の詳細は不明である〔上村1994〕。さらにその南方（同 d・e 地点）での試掘調査でも、弥生末～古墳前期の遺物包含層の堆積や径 8 m と推定される弥生～古墳期の大型円形遺構が報告されているが、性格を特定するに至っていない〔久世・吉川1984, 小森1998b〕。また、前述の泉涌寺境内の立会調査の際には、攪乱土から弥生後期～古墳前期の土師器も採集されており、高地性集落の可能性が言及されている〔土生田1981〕。このように、数少なくかつあいまいながらも報告地点を追跡すると、東山地区の南半に古墳時代前半期を中心とするの遺跡の存在がおぼろげながら推測されてくるといえよう。とくに、弥生末期～古墳前期段階の資料が目立つ傾向がうかがわれ、そうした時期かとみられる資料が採集されている南日吉町遺跡（556）〔京都大学文学部1960 p. 200〕や、泉涌寺境内の採集資料の存在なども考慮すると、庄内式並行期前後には東山丘陵上にもひろく集落が存在した可能性が指摘できる。しかしそれ以降、とくに飛鳥～奈良時代の遺跡については、全く手がかりを得られていない状況にある。街区や寺院造成により古代・中世に大規模な土地改変を被り、近代以降にはいち早く都市化が進展したという双方の影響から、復元はきわめて難しいのが現状といえようか。

4 遺跡の消長とその背景

地域ごとに状況をみてきたが、まずはここで鴨東地域全体の動向を時系列でまとめたうえで、画期を検討してみよう（図71）。

庄内・布留式並行期(a)は、現状では、岡崎地区のみに確実に遺跡が認定される。北白川や東山地区でも断片的な資料出土は認められるので、遺跡が存在した可能性は指摘できるが、具体像を描く状況には遠い。その後の古墳時代中期前半期(b)ころの資料は、鴨東地域全域で非常に希薄となり、活動が低調であったものとみられる。將軍塚古墳や八坂方墳がこの段階か、あるいはさらに遡る時期の墳墓となる可能性はあるものの、正確な時期比定には至らないため、評価できない。古墳時代中期後半～後期(c)では、定型化した須恵器TK208型式出現後の5世紀後半～6世紀後半には、ふたたび岡崎地区がひろく活動領域となるとともに、北側の吉田地区にも造墓が開始される。古墳時代終末期・飛鳥時代(d), おおむね6世紀末～7世紀前半にかけてになると、岡崎地区では資料が希薄化していくのに対して、吉田地区では吉田南構内から北側の本部構内一帯へと場所を移しながらも活動が継続されており、さらに北方の北白川～一乗寺地区においても、集落（別当町小倉町遺跡）や古墳の築造が広範囲で認められ、ひろく比叡山西南麓の扇状地上一帯が活動の対象に

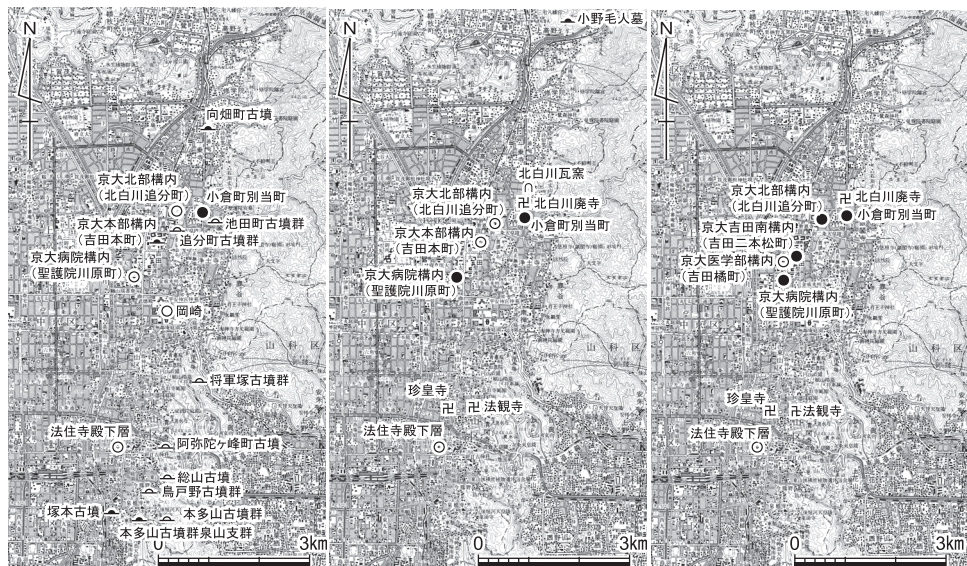
遺跡の消長とその背景



(a) 庄内・布留式並行期
(3世紀後半～4世紀後半)

(b) 古墳時代中期前半
(4世紀末～5世紀前半)

(c) 古墳時代中期後半～後期
(5世紀前半～6世紀後半)



(d) 古墳時代終末・飛鳥期
(6世紀末～7世紀前半)

(e) 白鳳期 (7世紀後半)

(f) 奈良時代 (8世紀)

<記号凡例> ●: 遺構・包含層の確認されている確実な遺跡 ○: 遺物採集にとどまる不確実な遺跡
▲: 調査済みの古墳・墳墓 △: 未調査の古墳・墳墓
卍: 寺院 □: 瓦窯

図71 鴨東地域の古墳～奈良時代遺跡時期別分布 縮尺1/15万

なっている。この段階には、確実に東山地区においても横穴式石室墳の築造がおこなわれており、その主体となる集団の居住地もあったと思われるが、はっきりしていない。おおむね白鳳期に相当する7世紀の後半(e)には、活発な活動空間としては前代の状況が継承されるとともに、北に北白川廃寺、南に法観寺が確実に造営される。北の北白川地区の一带では、寺院周辺に確実な集落の存在が判明しているのに対して、南の東山地区については寺院のみしかわかっていない。奈良時代の8世紀代(f)でも、基本的な様相は変わらないが、集落の分布は北白川地区のほか、西南方の吉田地区にも拡散している。

以上より、鴨東地域の遺跡動態において画期となっているのは、①全域が空白に近い状態となる4世紀末～5世紀前半にかけて、②伝統的活動地である岡崎遺跡が衰退・途絶する6世紀後半～7世紀前半、の2つであるといえる。①の画期については、同時期に乙訓や宇治・城陽など南山城地域で積極的に大型墳の造墓がみられる状況と対照的である。労働力がそちらに振り向けられた可能性を考えたいところだが、検証は広域での動態を視野に入れて、他日の課題としておきたい。

ここで重視したいのは②の画期である。岡崎遺跡の衰退・消失とともに、鴨東地域が南北2つのまとまりに収斂されていくことの意義はきわめて大きいといえる。岡崎遺跡一帯は、古墳時代中期ごろの空白はあるものの、弥生時代以来居住や造墓が続いてきた空間であり、湿地が形成されるような微地形にも恵まれていることから、水稻農耕村落には好適な土地条件であったと思われる。集落の内実は不明な点が多いものの、その豊かさを象徴するような資料として、さきにも紹介したような、堰や貯木施設状の遺構、琴をはじめとする木製品や未製品、多量の土器群といった遺物を挙げることができよう。湿地そのものは院政期の整地に至るまで存続していたこと、そして、大規模な洪水の痕跡などが認められていないことを考慮すると、広大な領域のほぼ全体で活動痕跡が認められなくなってしまう状況は、非常に唐突な感をぬぐえない。

岡崎遺跡の衰亡と入れ替わるように、北白川では小倉町別当町遺跡の集落が形成され、北白川廃寺の建立へと至っており、東山においても群集墳が築造され、法観寺や珍皇寺が造営されていくことになる。考古学の側面で畿内の古代集落を網羅的に検討した広瀬和雄は、6世紀末～7世紀初頭を中心とした時期に画期を認め、古代寺院を建立した首長層に率いられた集団移住による、洪積段丘面などの本格的な耕地開発がその背景にあったものとしている〔広瀬1989〕。扇状地が卓越する鴨東地域では、土地条件がいささか異なっているとはいえ、ここでの動向も、広瀬の想定するような背景をもった広域で連動する事態が

及んだ可能性が高いと考えられよう。たとえば小野氏や栗田氏など、6世紀後半に至って鴨東地域へと移入してきたと想定される氏族たちは、扇状地でも比較的高位の比叡山麓や東山山麓の耕地や集落の開発を進め、埋積が進みつつあった低位の湿地帯周辺で散在して活動する既存の集団を解体し取り込みながら、それぞれの拠点地周辺への集住と農業生産の集約化を進めていったのではないだろうか。またここには、それぞれの氏族の事情だけでなく、北方や東方へのルートの安寧を確保するといった、中央政権による集団再編の意図もあったのかもしれない。

ここで、その背景や要因をより具体的に考えてみるために、これまで保留してきた文献史料からみた鴨東地域の事情を参照してみよう。およそこれまで検討対象としてきた空間が律令期の愛宕郡の範囲あたるとは冒頭に記したが、郡内の氏族や郷についての研究は角田文衛〔角田1970・1975〕や岸俊男〔岸1988〕に詳しい。これらによると、平安遷都以前に鴨東地域に所在した郷は、相対的な位置関係としては、北から小野郷、栗田郷、錦織郷、八坂郷、鳥部郷、八坂郷と鳥部郷の西方に愛宕郷、と想定されている（図72左）。小野郷については、小野毛人の墳墓の所在からみて、そこが豪族小野氏の領域であり、鴨東地域の北辺の上高野から修学院にかけてに比定できる。それ以外は、飛鳥～奈良時代の遺跡分布とも対応させるならば、北白川がおおむね栗田郷、吉田が錦織郷に比定できようし、

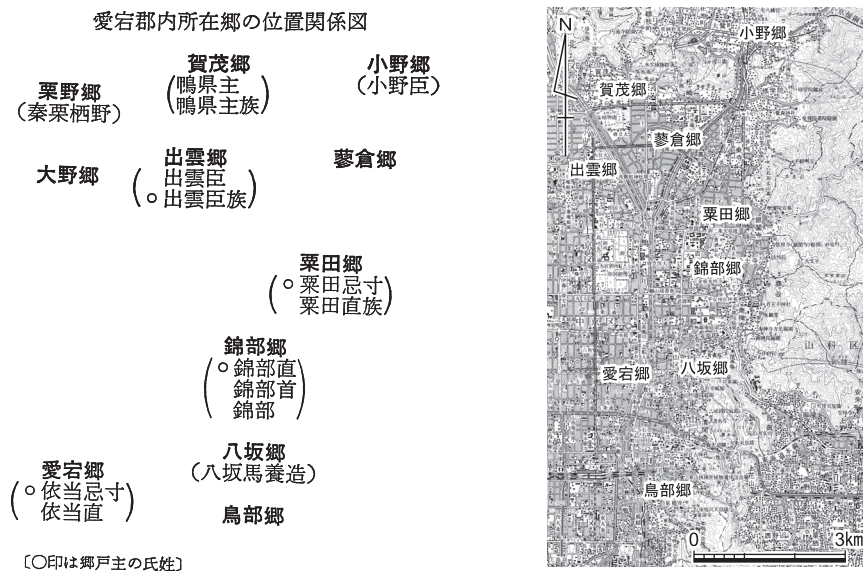


図72 鴨東地域周辺に比定される諸郷の位置関係
(左：〔岸1998〕を転載， 右：既存の調査成果や古地名など総合的に勘案し1/15万地形図上に配置)

八坂・鳥部・愛宕の諸郷は東山一帯に比定されることとなろう（同図右）。角田や岸は、愛宕郡について、多数の下級官人の輩出地であるとともに、こうした諸郷の氏族、とりわけ小野氏や栗田氏の一族などの中央における事績からみると、対外交渉や仏教文化摂取にも積極的な文化的先進地であった、としている。これはおもに奈良時代以降の史料に依るのであるが、今回の考古学的な情報からの検討によるならば、そうした先進性の端緒は、およそ6世紀後半にさかのぼる氏族たちの進出にあったと推定されることになる。

5 おわりに

本稿では、鴨東地域の古墳～奈良時代について、京都大学構内遺跡での未報告資料の呈示をおこないつつ、地域内での考古学的な情報を集積検討し、遺跡の動向を明らかにする作業を行ってきた。結果として、弥生時代以来の伝統的な農耕村落とみられる岡崎遺跡の衰亡に顕著なように、6世紀後半～7世紀前半に重要な画期があり、以後北白川と東山地域を中心とした南北のまとまりとして活動地が収斂していく様相がうかがえた。そしてこれは、文献史料から知られるような有力氏族達が移住し、開発が活発化していくという広域動態に連動するものであるものと推定した。考古学の側面、とくに遺跡動態に注目するならば、岡崎遺跡の放棄が鍵であり、在来集団の離散と新来集団の入植という、鴨東地域にも及んだ律令国家の統治施策を反映する事象とみなせる可能性を、あらためて指摘しておきたい。

残された課題は多い。ひとつは、土器編年の各段階への暦年代比定の問題である。とくに陶器編年TK209～TK217型式、飛鳥編年のⅠ期～Ⅱ期について評価が不安定で、論者による異同が大きい。たとえば、山城北部地域の須恵器編年としては岩倉窯跡群のものがあり〔宮本1992〕、岩倉Ⅰ段階≒TK209型式～217型式最古相≒飛鳥Ⅰ≒7世紀第1四半期～第2四半期、と比定されている。一方で小森俊寛は、かえりを有した須恵器杯Hの生産は7世紀後半代においても継続しているものの立場から、岩倉Ⅰ段階も7世紀後半代に位置づけている〔小森1998b〕。かつて出土須恵器から6世紀末～7世紀初頭と報告された遺構が7世紀中葉以降にもなり得るという事態が生じるのであって、このことは、たとえば鴨東地域でみれば、終末期の横穴式石室墳の築造時期や、小倉町別当町遺跡など集落の開始時期の評価の違いに直結する。推古朝での出来事とみるか、いわゆる大化の改新前後とみるか、天武朝期とみるかで、背景の評価はおおきく変わってしまうわけで、地域の遺跡動態を歴史的に評価していくうえでこれらは無視できない異同であろう。今回は、さし

おわりに

あたり年代観は〔菱田2007〕に依拠しつつ、鴨東地域における動態と画期の抽出をおこなうまででひとまず結びとし、暦年代比定の問題は、遺物の精査をふまえた今後の継続的な課題としておきたい。

課題のもうひとつは、鴨東地域周辺を含めた広域での遺跡動態解明への展開である。京都盆地の北部は、前述した洛北の岩倉盆地や嵯峨野地域をはじめ、洛南の鳥羽や山科盆地など、古墳時代～古代にかけての集落や墳墓、寺院址、さらには窯跡などの生産址がセットで良好に把握される領域の集合体で構成されている。従来は、墳墓のみ、あるいは寺院のみというように、それぞれ遺跡の性格ごとに分離して検討され、領域としての総合的な遺跡動態解明への視点は乏しかったように思われる。いずれの地域も豊富な資料蓄積があるため、精細な検証には多大な労力を要するが、最終的な目標として掲げることとし、今回はひとまず駄文を結びたい。

〔注〕

- (1) A O22区の発掘調査と遺物整理は五十川伸矢と伊藤が共同で担当した。ここで示す調査成果は五十川が作成した報文に多くを依りながら、伊藤淳史が調整したものである。
 - (2) 26～39については〔伊藤1999 図14〕に報告しており、同図のI 33～I 46に対応する。
 - (3) 5世紀後半代に比定されるTK47型式とそれに先行するTK23型式間の変化は漸移的であり、杯や蓋の頂部のふくらみが比較的乏しいという特徴を古相と評価するならば、7号墳の出土品は比較的古相のTK23型式に比定できるものとみている。
 - (4) 〔梅原1939〕〔角田1970〕〔網1993〕など。
 - (5) (財)京都市埋蔵文化財研究所が、寺域西方における平成18年度の立会調査(図69－調査C)において堅穴住居断面とみられる堆積を報告しているにとどまる〔吉本2007〕
 - (6) これに関連して、現在後二条天皇陵に比定されている北白川追分町所在の塚状の高まりについて、「泓(ふけ)塚」転じて「福塚」と呼称されていたとする伝承があることを考慮すると〔京都市北白川小学校編1959 pp.283－284〕、これも終末期の古墳である可能性があるものと考えている。
 - (7) 北白川小倉町の縄文時代遺跡上層においても南北方向の溝状遺構が検出され、多数の土器類の出土が報告されている(図69の調査A)〔京都府編1935 pp.17－28〕。
 - (8) 速報展示「法観寺の埴仏」(2009年9月、(財)京都市埋蔵文化財研究所)
- * 本稿には平成21年度科学研究費(基盤研究(C):課題番号19520654)の成果の一部を使用した。

表2 鳴東地域の遺跡と調査地点

[illegible]

鴨東地域の遺跡と調査地点

表2 鴨東地域の遺跡と調査地点 (つづき)

遺跡・地区	編年	300										400										500										600										700										備考	文																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																												
		庄内	布留	TK73 /216	TK208 /47	TK23	TK10	TK43	飛鳥 I	飛鳥 II	飛鳥 III	TK217	飛鳥 I	飛鳥 II	飛鳥 III	飛鳥 IV	飛鳥 V	平城 I	平城 II	平城 III	平城 IV	平城 V	飛鳥 I	飛鳥 II	飛鳥 III	飛鳥 IV	飛鳥 V	平城 I	平城 II	平城 III	平城 IV	平城 V																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																	
遺跡・地区	医学部構内 (吉田橋町)																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																</

表 2 鴨東地域の遺跡と調査地点 (つづき)

遺跡・地区	暦年 編年	300		400		500		600		700					備考	文
		庄 内	布 留	TK73 /216	TK208/47	TK23	TK10	TK43	TK209	TK217	飛鳥 IV	飛鳥 V I	平城 II	平城 III	平城 IV・ 城 V	
岡 崎	遺跡・地区															
	地点															
	53次	○	○			○? ○? ○? ○?										25
	54次	○														25
	58次					○? ○?	○? ○?									25
	62次	○	○			○? ○? ○?										25
	A	○	○		○	○	●	○	○							28
	B	●					●	●	○							2
	C	○	○				●	●	○							4
	D	●														83
將軍塚古墳群 八坂方墳 法観寺 珍皇寺旧境内 阿弥陀ヶ峰町古墳	E							●								44
	F	●														84
	527		●?	●?					●?							23, 24
	529		●	●	●?											27
	532										●	●	●	●	●	49
	535										●	●	●	●	●	
	a										●	●	●	●	●	74
	b	△							△? △?		△? △?	△? △?	△? △?	△? △?		3
	c	△?			△?	△? △? △? △?										26
	d	△?														40
法住寺殿下層 塚本古墳 総山古墳 南日吉町 鳥戸野古墳群 本多山古墳群 本多山古墳群泉山支群	e	△?														43
	550															46
	555								△? △?							
	556	△							△? △?							38
	557						△	△	●? ●?							88
	558								●? ●?							69
	f	△							●							36
	559															
	遺跡・遺物の確認、○包含層の確認、△遺物採集のみ、?は細別時期が特定困難であることを示す															

〔引用・参考文献〕

1. 網 伸也 1993年 「北白川廃寺の伽藍復元－最近の発掘調査成果による－」『平安京歴史研究』（杉山信三先生米寿記念論集）
2. 網 伸也ほか 1995年 「16 成勝寺跡」『平成4年度京都市埋蔵文化財調査概要』
3. 網 伸也ほか 2009年 『京都国立博物館構内発掘調査報告書－法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡－』（京都市埋蔵文化財研究所調査報告第23冊）
4. 有井広幸 1999年 「2 成勝寺跡・岡崎遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第86冊
5. 家崎孝治・加納敬二 1984年 「昭和57年度の試掘・立会調査概要」『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』
6. 泉 拓良・吉野治雄 1979年 「京都大学医学部遺跡A O18区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和53年度』
7. 泉 拓良ほか 1977年 「農学部構内B E33区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和51年度』
8. 五十川伸矢 1981年 「京都大学本部構内A T27区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和55年度』
9. 五十川伸矢 1986年 「京都大学医学部構内A N20区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和58年度』
10. 五十川伸矢・飛野博文 1984年 「京都大学教養部構内A P22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』
11. 五十川伸矢ほか 1989年 「京都大学病院構内A J18・A J19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1986年度』
12. 五十川伸矢ほか 1995年 「京都大学医学部構内A M17区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1992年度』
13. 伊藤淳史 1999年 「京都大学総合人間学部構内A O22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1995年度』
14. 伊藤淳史 2000年 「京都大学総合人間学部構内A R25区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1996年度』
15. 伊藤淳史 2003年 「京都大学医学部構内A O17区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1999年度』
16. 伊藤淳史 2008年 「京都大学医学部構内A P18区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2003年度』
17. 伊藤淳史 2009年 「京都大学吉田南構内A P21区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2004～2006年度』
18. 伊藤淳史・梶原義実 2007年 「京都大学本部構内A U25区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2002年度』
19. 伊藤淳史・富井真 2002年 「京都大学総合人間学部構内A R A R24区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1997・1998年度』
20. 伊藤淳史ほか 2005年 「京都大学北部構内B C28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2000年度』
21. 伊藤淳史ほか 2006年 「京都大学吉田南構内A R24区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2001年度』
22. 井上喜久夫 1979年 「二、鳥戸野陵外構柵設置区域の調査」『書陵部紀要』第30号
23. 岩井莞堂 1908年 a 「京都東山將軍塚付近の古墳発掘について（第1回）」『考古界』7－4
24. 岩井莞堂 1908年 b 「京都東山將軍塚付近の古墳発掘について（第2回）」『考古界』7－5
25. 上村和直 1993年 「白河に関する基礎的検討－調査と研究の動向－」『平安京歴史研究』（杉山信三先生米寿記念論集）
26. 上村和直 1994年 「32 六波羅政庁跡」『京都市埋蔵文化財調査概要 平成2年度』
27. 宇佐晋一・河合宏 1951年 「山城八坂方墳」『古代学研究』第5号

28. 内田好昭ほか 1995年 「12 最勝寺跡・岡崎遺跡」『平成3年度京都市埋蔵文化財調査概要』
29. 宇野隆志 2009年 「北山城における後期古墳の分布と群構成」『京都府の群集墳』(第16回京都府埋蔵文化財研究集会資料)
30. 梅原末治 1918年 「小野毛人の墳墓と其の墓志」『考古学雑誌』第七卷第八号
31. 梅原末治 1923年 「北白河町ノ窯址」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第四冊
32. 梅原末治 1939年 「第一 北白川廃寺址」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第十九冊
33. 梅原末治ほか 1935年 「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第十六冊
34. 岡田保良・宇野隆夫 1978年 「京大病院遺跡A F 14区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』
35. 岸 俊男 1988年 「山背国愛宕郡考」『日本古代文物の研究』(初出1978年)
36. 北田栄造 1985年 「Ⅲ 本多山古墳群泉山支群(R T 50)」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和59年度』京都市文化観光局・(財)京都市埋蔵文化財研究所
37. 京都市北白川小学校編 1959年 『北白川こども風土記』
38. 京都大学文学部 1960年 『京都大学文学部博物館考古学資料目録』1
39. 京都大学北部構内B F 31区調査班 1987年 「北白川追分町遺跡の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和59年度』
40. 久世康博・吉川義彦 1984年 「50 法住寺跡」『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』
41. 古賀秀策 1999年 「京都大学本部構内A X 25・A X 26区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1995年度』
42. 小森俊寛 1998年 a 「山城北東部」『古代の土器』5-2・7世紀の土器(近畿西部編)古代の土器研究会
43. 小森俊寛 1998年 b 「10 法住寺殿跡」『京都市埋蔵文化財調査概要 平成8年度』
44. 近藤奈史ほか 2005年 『白河街区跡・岡崎遺跡』(京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005-4)
45. 佐藤利秀 1981年 「鳥戸野陵外構柵設置区域の調査」『書陵部紀要』第32号
46. 佐藤虎雄 1928年 「塚本社及塚本古墳」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第9冊
47. 清水芳裕 1989年 「京都大学本部構内A X 30区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1986年度』
48. 清水芳裕・吉野治雄 1981年 「京都大学医学部構内A P 19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和55年度』
49. 田中重久 1938年 「法観寺創立の研究」『考古学』第9巻第2号
50. 田辺昭三 1981年 『須恵器大成』角川書店
51. 近つ飛鳥博物館編 2006年 『年代のものさし-陶邑の須恵器-』(大阪府立近つ飛鳥博物館展示図録40)
52. 千葉 豊 2000年 「京都大学病院構内A G 20・A F 20区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1996年度』
53. 千葉 豊 2003年 「京都大学本部構内A W 26区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1999年度』
54. 千葉豊・阪口英毅 2005年 「京都大学吉田南構内A N 22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2000年度』
55. 千葉 豊・阪口英毅 2006年 「京都大学本部構内A T 21区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2001年度』
56. 千葉 豊ほか 1997年 「京都大学本部構内A U 30区・A V 30区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1993年度』
57. 千葉 豊ほか 1997年 「京都大学本部構内A W 25区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1993年度』
58. 千葉 豊ほか 2007年 「京都大学病院構内A E 19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2003年度』

- 報 2002年度』
59. 角田文衛 1970年 「北白川廃寺の問題」『日本古文化論攷』
 60. 角田文衛 1975年 「愛宕郷と山城国造家（平安京閑話（17））」『古代文化』27-10
 61. 長戸満男 2007年 「無文銀錢試論」『研究紀要』第10号-30周年記念号-（財）京都市埋蔵文化財研究所
 62. 中村徹也 1973年 『京都大学農学部総合館周辺埋蔵文化財発掘調査の概要』
 63. 中村徹也 1974年 a 『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅰ』
 64. 中村徹也 1974年 b 「京都大学理学部ノートバイオトロン実験装置室新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要』
 65. 中村徹也 1975年 『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅱ』
 66. 奈良国立文化財研究所 1976年 『平城宮発掘調査報告』Ⅶ
 67. 奈良国立文化財研究所 1978年 『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅱ
 68. 西川幸治ほか 1990年 「1987年度京都大学構内遺跡調査の概要」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1987年度』
 69. 土生田純之 1981年 「泉涌寺雲竜院内陵墓地土堀改修箇所調査」『書陵部紀要』第32号
 70. 浜崎一志ほか 1993年 「京都大学病院構内A H 19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1989～1991年度』
 71. 浜崎一志ほか 1995年 「京都大学北部構内B A 28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1992年度』
 72. 樋口隆康ほか 1980年 「昭和54年度京都大学構内遺跡調査の大要と成果」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和54年度』
 73. 菱田哲郎 2007年 『古代日本国家形成の考古学』京都大学出版会
 74. 尾藤徳行ほか 1993年 「3 珍皇寺旧境内（92R T 240）」『京都市内遺跡立会調査概報 平成4年度』京都市文化観光局
 75. 平尾政幸 1987年 『一乗寺向畑町遺跡発掘調査概報 昭和61年度』
 76. 広瀬和雄 1989年 「畿内の古代集落」『国立歴史民俗博物館研究報告』第22集
 77. 丸川義広 1996年 「「鶴塚」古墳の検出と岡崎御幸の道筋」『研究紀要』第3号（財）京都市埋蔵文化財研究所
 78. 丸川義広 2000年 「各地域の首長墳の動向 山城②」『京都の首長墳』（第8回京都市埋蔵文化財研究集会資料）
 79. 丸川義広 2007年 「Ⅱ 北白川廃寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成18年度』京都市文化市民局
 80. 宮本一夫 1988年 「京都大学北部構内B J 31区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和60年度』
 81. 村山 某 1940年 「第5 京都市將軍塚附近発見古墳」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第二十冊
 82. 吉野治雄 1978年 「京都大学吉田キャンパスの試掘と立合調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』
 83. 吉村正親 1996年 「13 白河街区跡」『平成6年度京都市埋蔵文化財調査概要』
 84. 吉村正親 2005年 『白河街区跡・岡崎遺跡』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005-9）
 85. 吉本健吾 2007年 「7 上終町遺跡（06K S 430）」『京都市内遺跡立会調査報告 平成18年度』京都市文化市民局
 86. 米倉二郎 1956年 「山背の条里と平安京」『史林』39-3
 87. 竜子正彦・尾藤徳行 1996年 「8 北白川廃寺」『京都市埋蔵文化財調査概要 平成6年度』（財）京都市埋蔵文化財研究所
 88. 陵墓調査室 2003年 「鳥戸野陵の墳丘外形調査」『書陵部紀要』第54号
- * 文献は50音順に配列。3名以上の連名の場合は筆頭者以外を「ほか」で省略。